

琵琶湖流入河川に生息する タンカイザリガニの分布および拡散状況

曾我部 共生、北野 大輔（びわ湖サテライトエリア研究会）

琵琶湖には 100 を越える一級河川が流入している。そのうちのひとつが滋賀県高島市を流れる石田川であり、その上流には大正時代に築造された灌漑用ため池である淡海湖が位置している。淡海湖は湖面 12ha、貯水量 132 万トンの大規模なもので、貯水池として農林水産省の『ため池百選』にも選定されている。また、2008 年に滋賀県の『守りたい育てたい湖国の自然 100 選』にも、上流にある平池とセットで選定され、「ふるさとの野生動植物を絶滅させることなく、子や孫たちの未来へ引き継ぐため、保全、再生を図ることがふさわしい野生動植物の生息地」のひとつとされている。

しかし、淡海湖には 1926～30 年にわたり北米からウチダザリガニが移植されている記録があり、過去の調査から特定外来生物であるウチダザリガニが定着していることが判明している。（今回はほかのウチダザリガニと区別するため、タンカイザリガニの名称を使用する。）そのため、淡海湖周辺の水域において、在来魚の保全、再生を図っていく上で、現在生息しているタンカイザリガニの定着状況を把握し、記録することが喫緊の課題である。

淡海湖では、びわ湖サテライトエリア研究会によって、これまで 2005 年と 2011 年にタンカイザリガニの生息調査が実施されてきた。これまでの調査では、タンカイザリガニの生息確認とその分布域の把握をしてきた。しかし、過去の両調査において、淡海湖内ではタンカイザリガニの生息が確認できていないことに加え、タンカイザリガニの分布域の拡大が懸念されていた。そこで、本調査では、淡海湖内および淡海湖の流入出河川を広域にわたって調査し、淡海湖周辺における生息分布域を明らかにすることを目的とした。

調査は 2017 年 7 月 29 日、8 月 29 日・30 日、10 月 9 日、2018 年 11 月 27 日に実施した。採集方法は、流入出河川では第 1 期、第 2 期調査と同様にタモ網を用い、淡海湖内では魚のアラを餌にしたもんどりを用いた。採集されたタンカイザリガニは 99% エタノールを用いて固定してから持ち帰り、体長測定、雌雄確認を行った。

過去の調査と同様に、タンカイザリガニは淡海湖の上流に位置する平池周辺において多く生息していた。しかし、これまでの調査で生息が確認されていなかった淡海湖の堰堤下の流出河川において、2 個体のタンカイザリガニが採集された。また、淡海湖内では、もんどりによってタンカイザリガニ 1 個体が採

集された。淡海湖の流入河川および平池周辺では、体長 11 mm～82 mm までの様々な体サイズのタンカイザリガニが採集され、体長 60mm 以上の体サイズが大きい個体も多く、抱卵個体も確認された。一方で、淡海湖内や淡海湖の流出河川において採集されたタンカイザリガニの体サイズは、体長 40mm 以下であった。

本調査により、従来の調査では確認できなかった水域においてタンカイザリガニの生息が確認された。また、淡海湖の流出河川においてナガレホトケドジョウなどの希少魚種の生息も確認されたことから、希少魚種とタンカイザリガニの生息環境と重複していると考えられる。こうした現状を放置すると、希少魚種の生息状況が一層悪化することが懸念される。

今後も滋賀県の『守りたい育てたい湖国の自然 100 選』に選定されている淡海湖周辺の水域では、特定外来生物による在来生物群集への影響を抑えながら、豊かな自然環境を次世代へ引き継いでいくための取り組みを続けていくべきであろう。